

昇給綺談

雨野君が正午の休憩時間に一人で社の前の舗道をぶらついていると、同僚の加宮君が背後からやつて来て、肩を敲いた。

「君、女の写真を会計簿の中へ挟んでおいたな!？」

「うん、——見たのか!？」

「チラリとね。」

雨野君は何ともいえないバツの悪そうな顔をしたが直ぐ、斯うなれば——といった様子で図太く構えた。

「シャンだろう。」

「いや出来たらゆっくりと拝みたかったんだけど、惜しむらくは社長が持つてったよ!」

「なに、社長が! いつ?」

「つい今だ、みんな戸外に出ちゃって部屋には僕だけだった。其処へ是が、」

と、親指を示して、

「ブラリとやって来て、みんなの帳簿をバラバラとめくって眼を通し始めたのさ。その時、君とこの会計簿の中から写真が一枚おっこつたもんで、社長の奴、それを拾って暫く眺めていたが衣囊へ入れて持つてつちやつた。」

「ヒエッ!」

雨野君は思わず悲鳴を上げて終った。加宮君は友達甲斐に鳥渡真顔になって、

「まさか、君、会社の女事務員のじゃあないだらうな!？」

斯う念を押したが、雨野君が頷くのを見ると、

「じゃあいいさ。問題はねえ! 少し位しぼられるのは棄た。新妻京子夫人の怨み思い知れた!

あはははは。」

と悄げている雨野君を突き飛ばして愉快そうに笑った。

午後の執務時間になると間もなく、給仕が小さい紙片を雨野君の所へ持つて来た。(御来室あれ、清本)と書いてある。清本と言うのは社長、詳しくは当ヤマトインキ製造株式会社社長清本清平氏である。

雨野君はこの世に名を聞いただけでも、慄然とするものが二つある。疣蛙と清本社長である。疣蛙の方は、物心が付いた頃から、ちらりと見ただけでも直ぐ熱を出したものだ。

雨野君がまだ五つか六つの時、そのころ家にいた老いた忠僕は、

「そないなこんで、ぼんち、何時まで経っても、こんな虫ケラに怖じとらんらんぞ！」

と、主家の若君の将来を思う余りか、自分の背中のねんねの中へ疣蛙を五、六匹入れて雨野君と同居させた事がある。うんともすうとも言わず、余り温和しいので家へ帰って下してみると、ぼんちは完全に気を失っていたそうである。

その雨野君が蘇生し成人し、大学を出て七十円頂戴する身になった途端、社長清本清平氏が蛙同様の権力にただわけもなく畏怖心を抱いているわけではない。人間には苦手という奴があるが、雨野君の場合もあれである。根がお坊っちゃん育ちの雨野君。今までに別段、どんな人間の前に出ても気遅れした経験もないが、入社試験の時初めて顔を合わせた時以来、どうも不思議に清本清平氏にだけはいけない。腕力にかけたら、たとえ清本社長が二十貫の肥満漢にしろ、雨野君は高等学校時代に鳴らした柔道二段だ。教養にかけたって学歴不明の社長に比べれば、どう考えても最高学府を出たての雨野君の方が上だ。にも拘らず雨野君は社長が怖いのである。雨野君はこれに対していろいろ考えた挙句、結局、嫌いな蛙に結びつけてその依って来るところを自分に説明する。つまり

大きいお腹を抱えている所と、人を喰った様な顔に所きらわず、蕎麥粕や名の知れないぼつちのくつついている所、——あれが曲者なのである。そういえば成程公平にみて、清本清平氏は何処か疣蛙と一脈相通するものを持っているようである。

扱て、この清本社長に呼ばれた雨野君は深呼吸を三つしてぐつと丹田に力を入れ、それから静かに扉の把手を廻した。すると早くも大きい机を隔てて、ぼーっと社長の緒ら顔が霞んで見えてしま

う。

「もつと、こつちへ寄り給え！」

「はあ。」

「もつと寄つたらええ、話がでけん！」

雨野君は仕方なく机の傍まで進み寄つたが妙に膝の関節ががたつく。するとやがて社長は一枚の写真を手にして、それでコツコツと机を敲いて、

「他でもないが、会計簿の中へこんな物を入れておいたのは君かね！」

「申し訳ありません。」

「申し訳あるもないもないが、ともかく女の写真を眺め乍ら事務をとつとすることは辛いだろうが、今後、遠慮して貰いたい。」

とちくりと皮肉を言った。

「はあ、何とも早や——。」

「あはははは。そう恐縮するには当らんよ。若い者には若い世界があるくらいのはわしも知つとる！ 一体、この女はどういう女かね！」

と今度は清本社長いやにくだけて出た。

「はあ、あの——。」

雨野君がもじもじしているのを、社長はニヤリとして、

「カフェーとは違うんか、怖らくそうじゃろう。一目見れば判かる。」

この際、(そうで御座います)と言つて、社長の自尊心と鑑識眼に敬意を払つておくのが一番賢

明な策であり、そのくらしいの融通の利かない雨野君でもない筈だが、

「はあ、あのー。妻です、奥さんであります。」

と、雨野君訂正しないと何か気がおさまらなかつた。

「なに、妻じゃ！ 誰の？」

「私のであります。」

「君の!？」

「はあ。」

「ばか！ 自分の女房の事を奥さんなどと言う奴があるか！」

それから暫らく、くしゃくしゃした顔をして黙りこくつていたが、いやにしんみりと、

「第一、君は、女房の写真などをどうするつもりかね!？」

「私は会社で妻の写真を見、妻は家で私の写真を見ます。」

「いつ？」

「十時と十二時と三時で、決して始終見とるわけではありません。」

「それはそうじゃろう。だが何の為にそんな面倒な事をし居る!？」

「朝別れまして晩の五時まで逢えんからであります。」

「ふーむ。」

社長は茲で鳥渡顔を緊張させて、

「一体、どちらが先にそんなことを提議したんじゃ。」

好奇心を油ぎつた顔の真中に集中させた。

「妻の方であります。」

雨野君が答えると社長は暫く呆然と雨野君の顔を見詰めていたが、聴て何とも言えない表情を一つするとピリツと写真を二つに破り、それを丁寧にも一度重ねて更に二つに破り、さもふがいない奴といわんばかりに、

「かえれ！」

と一言言った。

2

雨野君はその日の夕食が済んでから昼間の事件を逐一愛妻京子さんに話した。

「——愛の絶対と言う事を解せん社長は実に不幸だと思うね。写真をピリッと破いた時の奴の顔は気のせいかな淋しそうだったよ。」

今迄黙って聞いていた京子さんはこの時突然、

「ちよっと、貴方！」

と夫君の言葉を遮った。

「で、貴方その時どうなすって!？」

「どうもしないさ。何しろ相手が清本の疣蛙では。」

「どうもしないって、只そのまま帰って来たの!？」

京子さんは暫く呆れた様に夫君の顔を見守っていたが、突然、

「そう、いいお心掛けですわ！」

と、妙に改まった調子で言うのと、すーっと起って勝手に行った。それから何時まで経っても姿を見せなかった。

雨野君は夕刊を隅から隅までよみ終り、二本目のバットを呑み終ってからどうも様子のただごとでないのに気がついた。不審に思つて勝手に覗いて見ると、京子さんは冷い板の間に俯伏して泣いているのである。愕いたのは雨野君である。

「一体、どうしたんだい!？」

京子さんの肩に手を掛けると、瞬間、京子さんはびりりと身体を震わせて、

「触らないで頂戴！」

と金属性の声を張り上げた。そしてこの一声を最後に京子さんは、それから雨野君がなんと言つても口をきかなかつた。

「僕が悪いなら詫びる。」

「何か解んないけれど、兎に角一応お詫びしておこう。」

「いや、重々僕が悪かつた。何とも早や申し訳ない！」

雨野君がなんといいおうと京子夫人は執拗に口を開かない。雨野君もこの長期抵抗にはさすがに参つた。つい痲痺を破裂させて、

「ばか！　せめて畳の上で泣け！　其処は冷えるぞ。」

それから座蒲団を遠くから投げてやった。長いこと京子夫人はそれに見向きもしなかったが、「あり難う。」

さすが、一言礼だけはいつて、よほど寒くなったのだろう。その上に載った。それから二時間、お互いに一言も喋らずねばりつづけたが、女の一念は怖ろしいもので、到頭雨野君が敗れた。

雨野君は遂々堪まらなくなつて、

「頼むから何とかいえよ、一体何を憤つてるんだ。ぶるぶる震えているじゃあないか。喋つたら少しは暖まるだろう！」

すると京子さんは漸く唇の紫色になつた顔を上げて、

「何を憤つてるかまだ解んない！ 呆れちゃうわ！」

と齒をカチカチと音をさせた。

「有難う、よくぞ喋つて呉れた！」

「なに言つてんの！」

余程寒かつたとみえて、京子さんは一旦喋り出したとなつたら、それから息もつがないで捲し立てた。

「ねえ貴方、貴方は一体社長さんと妾と孰らが大事なの？ 社長さんに妻が侮辱されても、一向に平気なのね!? 社長さんを愛してんのか、それとも妾を愛してんのか、わたし想像に苦しむわ。貴

方は大体結婚する前に妾に何と言つたか覚えていらつしやる？」

「待てよ。何もかもそう一度では整理がでんよ！ 一つずついえ。一つずつ。」

「わたし、ただおかしいの——君に指一本でも触れる奴があれば誰であろうと容赦はせんなんて——」

「それがなぜおかしい。」

「あれ嘘なの。」

「嘘なもんか！」

「では、社長さんが妾のことを女給に間違えたり、おまけに妾の写真を破つたりして、それなのにどうして容赦したの!？」

「容赦したわけではない。怒りを感じなかつたんだ。」

「社長さんだからでしょう。あなた、怖いよ、きっと。妾、貴方のその心根が悲しいの。妾を若し真固に愛してんなら、社長さんだろうが誰だろうが頭をコツンとやらざるを得ない筈よ。」

「社長の頭をか！」

「そうよ。たとえ齧首されようと、それを敢てしてこそ真固の愛だわ。それを貴方は——。妾だけ貴方を愛していつまもない！」

京子さんの声が再び涙声になつたので、雨野君は周章てた。

「よし、では殴る。明日ザクロの如く殴り潰してやる！」

その翌朝、京子さんの機嫌は悉皆<sup>すつぱ</sup>り回復<sup>くわふく</sup>していた。

「妾<sup>めかけ</sup>、今日お実家<sup>まこと</sup>へ手紙を書いて当分生活費を送って戴く様にするわ。だから貴方思い残す事なくやって来てね！ 私等<sup>たち</sup>の神聖な愛を汚した以上寸毫<sup>すんごう</sup>も假借<sup>かじやく</sup>する要はなくてよ。断固<sup>だんこ</sup>として徹底的に膺懲<sup>ようてい</sup>すべきだわー！」

「大丈夫だ。あの疣蛙<sup>いぼがえる</sup>あつさりと社長室の絨毯<sup>じゅうたん</sup>の上に眠らせてやるよー！」

雨野君は斯<sup>こ</sup>う答え<sup>な</sup>え乍<sup>な</sup>ら、右手で拳固<sup>げんこ</sup>を作<sup>し</sup>て左手で撫<sup>な</sup>でてみたけれど何故か妙に自信のない気がした。

その日雨野君は会社で社長室の前を四五回彷徨<sup>うろろ</sup>ついただけで、遂々<sup>とうとう</sup>社長室には入れなかった。よつくも愛する妻の写真を破つたな、社長と雖<sup>い</sup>も容赦<sup>ゆるみ</sup>はせん、ポカン——と頭の中では何十回も社長を殴っているのだが、いざ実行となつて社長室の前まで行くと、四肢<sup>うし</sup>が妙に硬<sup>こわ</sup>ばつて言う事をきかなくなつた。殴るのが目的なのだから何も正攻法でなくてもいい。背後<sup>うしろ</sup>から行つて、あの大きな毛の薄い奴をコツンとやって逃げたらいい。そう考<sup>かん</sup>えて便所<sup>べんじょ</sup>へ行く社長の背後姿<sup>うしろすがた</sup>を睨<sup>にら</sup>み付けてもみたけれど、是<sup>これ</sup>も結局<sup>けつぎ</sup>、心臓<sup>しんざう</sup>の動悸<sup>どうき</sup>が早鐘<sup>はやね</sup>の様<sup>よう</sup>になつただけで、幾<sup>いく</sup>ら藻搔<sup>もが</sup>いても足は一向に動かかなかつた。

三時頃、京子さんから電話がかかった。

「どう首尾は？」

「首尾は——残念乍<sup>な</sup>らだめだ！」

「どうして？」

「奴早くも悟つたか、今日は出て来ない。何なら、是から自宅へ押し掛け行つてやつつけてもいい。」

「でも、態々<sup>わざわざ</sup>お家まで押し掛けて行つたら、奥さんがお気の毒よ。明日まで我慢なさい。」

さすがに女は女だけに神経が妙なところに細<sup>こ</sup>い。

「それもそうだな。では残念だが一日延ばそうか！」

雨野君そう答えてほつとした。

その翌日も雨野君は京子さんの激励の言葉に送られて家を出た。剣術の出来ない仇討<sup>あだうち</sup>が強い敵に出逢つた時の様に寂しい笑を浮かべて家を出た。愛する妻のためだ、よしや返り討になろうとも何の思い残す所やあらん——雨野君は幾度も幾度も自分に言い聞かせた。

その日、雨野君はエヘンと大きく咳払いして、思い切つて荒々しく社長室の扉<sup>びら</sup>を押し開けた。途端<sup>な</sup>内部<sup>うち</sup>から、

「喧ましい！ 静かにできんか！」

と割れ鐘の様な声が響いた。

「はあ！」

と思わず機械的に声帯が開いて、次の瞬間、是も機械的に、

「申し訳ございません。」

と上半身が四十五度曲った。こうなるともう駄目だ。

「何の用じゃ！」

「はあ。」

「何用じゃ！ 早う言わんか！」

清本社長今日はよほど御機嫌が悪いとみえる。かみつきそうな顔をしている。

「はあ、あの――、何ぞ御用は――。」

「ばか！ それを儂の方で訊いとるんじゃ！」

「はあ。」

結局社長の持つ一種不可思議な妖気に当てられて、一言も言わずに敗北に帰して終った。

その日も京子さんから電話がかかって来た。

「いさましくやって!？」

「ううん。それが奴今日も来ないんだ。どうも病氣らしい。この分だと当分来ないかも知れん。まあ待て！ あせるな！」

#### 4

それから一週間。雨野君はもう社長膺懲はあきらめてしまった。京子さんの前ではなんとか口を合せているが、とても実行不可能なこともさどっている。そうした或日の、もうそろそろ退社時刻に近い時分、雨野君は社長室に呼ばれた。

「君んところへは毎日妻君から電話がかかって来る相じゃな。」

今日はいつもと違って清本社長、静かな声である。

「はあ。」

と答え乍ら雨野君は次に来るものを予想して怖る怖る社長の顔を窺った。が、社長は、  
「写真は止めて今度は電話か。いや、夫婦仲のええ事は何よりじゃ。夫婦は二世の契じゃ、その位の愛情がなければいかん！」

と平生になくしんみりと言った。怒っているわけでも、皮肉っているでもないらしい。言葉にいやに実感がこもっている。雨野君は思わずほっとした。

「時に用事じゃが、この手紙を儂の家内に渡して貰いたいんじゃ。急に家内に用事ができたが、儂

は是から重役会議で桜会館に行かねばならんで、君に家まで御足労を願うわけじゃ。」

「はあ！」

「重要な手紙じゃし、それに女房への手紙じゃから、僕は君が適任じゃと思うとる！」

社長は斯う言つて一通の封書を差出した。

「はあ。有難う御座います。」

余り名誉でもないけれど雨野君はお礼を言つて、その封書を受け取つた。その封皮にはお、その殿と認められてあつた。

それをポケットに入れて、雨野君が会社の前で円タクを拾おうとしていると、思いがけなくばかり京子さんとぶつかつてしまった。

「あら、あなた、もうお退社！」

（いや社長の用事で）と危く口まで出かかったのを、ぐいっと飲み込んで、

「うん。」

と頷いた。

「社長さん、今日も来ないの？」

「来さえすればやつけるんだが、奴今日も来ない！」

「まあ、口惜しいわね。妾今日あたりは来ているんじゃないかと思つて、電話をかけるのを止めて、

態々激励に来たのに！でも仕方ないわ、こないなら。」

女の気持というものは何と飄々と変わるものであろう。社長膺懲をあきらめると、京子夫人は、

「是から大丸へでも行つて、それから何処かで御飯戴かない？」

といった。

「うん、それもいいな！」

と、返事をして雨野君悉皆り当惑して終つた。途中で何とか上手く言つて別れる工夫もあるだろう。何も半時間や一時間を争う手紙でもあるまい、そう考え乍ら京子さんと円タクに乗つた。

妻君のお供でデパートの反物の中を、あちこち引張り廻わされて、それから御飯を食べに静かなレストラントに入った時はもう街にぼちちり灯がともっていた。

食事が終えてから、雨野君は外套を妻君に預けて化粧室へ立つて行つたが、これがいけなかつた。その留守に、京子さんは夫君の外套のポケットを何心なく探つて大変なものを発見して終つた。キリキリと表情が變つて来た。雨野君が卓子に戻るやいなや、ロボットのよう機械的にいきなり手紙を雨野君の胸許を狙つて突き出した。

「あなた、これ、なあに。」

言葉と眼とをみごと使い分けている。鋭い眼付に似ずいやに口調は静かだ。

「あつ！それか！」

雨野君はあわてた。

「あっさり仰有るのね。おその殿って一体どなた？ タイピスト、それとも女給さん？」

「じよ、冗談じゃあない。それは人に頼まれた手紙だ。」

「誰に!?」

「誰にって!」

「御返事できないのね。おほほほ。」

京子さんは決して可笑しくもないのに、茲でいとも静かに笑った。

「人に頼まれたんだよ。字を見れば解るじゃあないか。字を見れば。僕が大體、おその殿なんて古風に書くかい!」

「字なんてどんな字だって書いてよ。それにこのおそのなんて貴方の手だわ。」

疑心暗鬼とは怖ろしいものだたと雨野君はつくづく感心した。が徒らに感心している場合でないのに気がつくくと、

「ばかを言つては困る。よく見てくれよ。」

「なら、一体どなたにどう言う理由で、この手紙を頼まれたの。その辺を判然り説明して戴きたいわ。」

「うーん。実は、社、社の奴にね。」

「社の方がどうしたの!？」

雨野君は一生懸命考えたけれど、咄嗟の場合いい智慧は浮かばなかった。

「いや、家へ帰ってゆっくり話そう。それにはいろんな面白い話もあるんだ。家へ帰って話そう。

あはははは。」

今度は雨野君の方が可笑しくもないのに無理に笑って、手紙を受け取ろうと京子さんの方へ手を差出した。

「何を仰有るの!」

と京子さんはキリッと睨めると、すげなくその手を払いのけて、

「妾はそれまで待てなくてよ。此処で一寸拝見しますわ。失礼!」

とヒステリックに言うなり、ピリッと封を破いた。

「あっ!」

と雨野君が起上ったけれど、もう遅かった。

おその殿。

御許の意見通り、家で一緒では悲しさのみ先きにたち、到底、潔き自決は覚つかない故、別々に決行する事にしよう。僕は天晴れ社長らしく、重役会議の最中、ヤマトインキ製造株式会社

の崩壊と共に花と散る所存である。時間は正七時。御許も社長清本清平氏夫人らしく、七時を合図に、見事に自害して相果ててくれ。此期このころにのぞみて又何またをか言わん！

清平。

「まあ、あなた。社長さん御夫婦の心中の打合わせよ！」

「だから言わん事じゃあない。社長に頼まれた大切な手紙だ！ ばかッ！」

「何をそんな怖い顔して睨にらむの！ 嘘つき！ ちゃんと社長さんは会社じやうに居たじゃあないの！」

「この場合それ所ではない。どうしよう、どうすべきか、どうしたらいいか!？」

雨野君は手紙を持ったまま悉すつ皆りうろろうして終った。それに反し京子マダム・ロワンチストさんの方は、夫君にかかつていた疑惑が晴れた悦びが胸にいっぱい、憎むべき社長の生死などは遠い彼岸ひがんの問題であった。

「道は二つよ。此手紙この奥さんとこへ持って行って上げて希望通り心中させて上げるか——それとも。」

「ばか！」

「そんなら社長さんの方を止めて人命救助すればいいわ。今、六時半だから上手くゆけば間に合うわ。その代り、間に合ったら、あなた序ついででに、私の見ている前で男らしく敵を討って下さるわね。」

5

「——で、以上述べました如く、吾社わがの財政破綻を救うの道は絶無なのであります。絶体絶命、只、差押えを待つのみであります。光輝ある三十年の歴史を有する吾がヤマトインキ製造株式会社の玉碎に際しまして、余は只、債鬼細井インキ消シ株式会社社長、細井筋五郎の奴を、心の底の底の奥底から、憎んで憎んで、ニツクミ通す者であります。ああ、思うにインキ消シあつてのインキではないのであります。あくまでインキあつてのインキ消シであります。然るに此この本末、物の順序顛ひ倒たいたしましたして、彼細井インキ消シの奴は——。」

茲こゝで、清本社長は興奮の極、後の文句が出なくなって終しまった。丁度、折よく給仕がお茶を持って来たので、それをごくんと飲み干して、鳥渡ちよつと、時計を見て、給仕に、

「七時になったら知らせて呉くれ！」

と小声で言った。それから給仕が廊下に出て行くのを待つて、更に語をついだ。

「とまれ、事態を茲に至らしめた社長としての罪や、甚だ浅からざるを、不肖清本清平、肝に銘じて居おります。いずれ何らかの形に於おいてその責を明あきかに至つす心算つもりであります。」

満場——と言っても五人の重役だけであるが、肅しやくとして声なき中を清本清平は静かに腰こしを降おろした。次に、雄弁を以つて財界にその人ありと知られたY氏が平生せいぜいになく悄然しよほりと立上つて、

「えー、事茲に至りましては、亦、何をかよう言いましようや。」

と蚊の鳴く様な声で冒頭した。次に何時まで経っても後の言葉が続かないので見ると、Y氏はその言葉の如く、何も言わずに悄然と着席していた。

次にM氏が起つて、

「吾々六人の、新しく此処に誕生いたしましたプロレタリアートは今後如何に生くべきであるか、是こそ最も重大な目下の問題であります。真実、吾々は明日より一銭の金もないのであります。あるものは山の如き借財と哀れな家族であります。徒らに歎き悲しみ意気消沈するの秋ではない——。」

と落着いた態度でドンと卓子を敲いた時、意外の闖入者が一人現われた。それは他ならぬヤマトインキを此の危殆に瀕せしめた細井筋五郎氏であった。木綿服に黒メリンスの兵児帯をしめて、どう見ても今財界に飛ぶ鳥落す細井インキ消シ株式会社社長とは見えない。

一同が呆然としている中を、細井氏は小さい身体をちよこちよこ卓子の所に運ぶと、鳥渡一同に挨拶して、

「皆さん、お揃いですな！ えー、実は早速ですが。」

と、しわがれ声で口を開いた。

「儂の家内は長年の喘息でしてな。薬も医者も八方手を尽くしましたが、どうも駄目ですじゃ。一

向に治らん。わしも、若い貧乏時代から共に苦勞して来た仲と思うと、あのぜいぜいが不愆で不愆でなりませんじゃ。ああ仕うかして、楽に呼吸の出来る様にしてやり度い。ぜいぜい言わずも生き居れる様にしてやり度い。こう思ひましてな、いろいろ考えた挙句、日頃信仰している山洞稲荷に伺いを立てましたじゃ。すると巫女の言うには、飢えている人間を六人救えば家内の喘息は立ち所に治ると斯ういうんですじゃ。

先刻夕食の時、儂は不図、あんた方の事を思い出しましたじゃ。重役五人に社長一人、都合六人、而も心がらとは云え、確かに飢えかかってなざる。本所深川でルンペンを探すより此の方が手数がいらん！ 何分融通してある金は百や二百の金ではない、が儂にしてみればあってもなくても差障りない端した金ですじゃ。どうです、もう五年許り待つて上げましょう。あんた方もひ干しにならんですむ、わしの家内も喘息が治る！」

細井筋五郎氏は用件をてきぱきと説明して一同を見廻した。今の場合、社長始め誰にも異存のあらう筈はなかった。萎れかかった草が水を得た様に一同の顔色は急変した。

社長は声が出ないらしく、口をもぐもぐさせていたが、いきなり細井氏の手を力いっぱい握りしめて瞑目した。

その時、給仕が入って来て、

「社長様、丁度、七時でございます。」

と言った。途端、社長の顔は再び紙の様に白くなって、細井氏の手を握ったまま、うわっと異様な声を立てて、よろよろと蹣跚よろめいて、

「妻が死ぬ、おそのが——。」

と号さけんで、細井氏の腕の中へ倒れて気を失った。小さい細井氏はそれと一緒に床の上に仰向けに倒れた。

雨野君夫妻が駆け付けたのはそれから間もなくだった。正気になった社長に、雨野君は一部始終を説明して、手紙を夫人に渡さなかった事を話した。清本社長は小ちゃい眼から大きい涙をぼろぼろ落して、左手で細井氏の手を、右手で雨野君の手を取って、悉すつ皆かり興奮きんしていた。

「ねえ、あなた、これはこれ、あれはあれよ！」

と、突然、京子さんはそつと雨野君の背をつつき乍ながら、それとなく社長膺ようちやう懲ちやうを提議ていぎした。

「だって、お前、今は——。」

と雨野君が蹣跚ちやうちやうしているのを、京子さんは美しい眼できつと一つ睨にらんでつんと横を向いた。

絶体絶命——矢張やまり京子さんの方が雨野君には大事であった。

「社長、これはこれとしまして、貴方あなたは一週間前、妻の写真を破りました。最愛の妻の写真を冒瀆ぼうどくした以上、たとえ、社長と云いえども、ゆ、許さん！」

と言いつ乍ら、眼をつぶって、ポカンと社長の頭を殴った。実に見事に！ 余り急だった社長は、

「あつ！」

と号さけんで顔を擥しかめたが、聽わがて苦笑し乍ら、

「すまん——」

と言った。

「いや、あれは儂わがが悪かった。なぐって気がすむなら殴なぐってくれ！ わしも女房が大事じゃ、細井さんも奥さんが大事じゃ。君だつてそうじゃ、いや重々、わしが悪かった。」

社長は斯う言つて頭を下げた。意外に、社長が下手したてに出たので、雨野君は急に元気が出て、

「どうする、もつとか！」

と、小さい拳固げんこを作ったまま、いつになく勇ましく、京子さんの方をみた。

「あら、いいのよ、もう。」

と言いつ乍ら、京子さんは気の毒そうに社長の顔を眺めて、それから誰にも知れない様に夫君の手をきゅつと握った。

雨野君の月給が二十円昇給したのはその翌日の事であった。

